

2019年10月6日 川越教会

## 我らの帰る所

丸山 勉

### [聖書] 詩編 90 章 1～17 節

【祈り。神の人モーセの詩。】

主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。

山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から

世々としえに、あなたは神。

あなたは人を塵に返し「人の子よ、帰れ」と仰せになります。

千年といえども御目には 昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。

あなたは眠りの中に人を漂わせ 朝が来れば、人は草のように移ろいます。

朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい 夕べにはしおれ、枯れて行きます。

あなたの怒りにわたしたちは絶え入り あなたの憤りに恐れます。

あなたはわたしたちの罪を御前に 隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。

わたしたちの生涯は御怒りに消え去り 人生はため息のように消えうせます。

人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても得るところは  
労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。

御怒りの力を誰が知りえまじょうか。あなたを畏れ敬うにつれて

あなたの憤りをも知ることでしょう。

生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができます  
ように。

主よ、帰って来ててください。いつまで捨てておかれるのですか。あなたの僕らを力  
づけてください。

朝にはあなたの慈しみに満ち足らせ 生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください。

あなたがわたしたちを苦しめられた日々と 苦難に遭わされた年月を思って  
わたしたちに喜びを返してください。

あなたの僕らが御業を仰ぎ 子らもあなたの威光を仰ぐことができますように。

わたしたちの神、主の喜びが

わたしたちの上にありますように。わたしたちの手の働きを

わたしたちのために確かなものとし

わたしたちの手の働きを どうか確かなものにしてください。

### [序] 「人の子よ、帰れ」

旧約聖書詩編 90 編は、普段の礼拝の中ではあまり読まれることが多くはない詩編  
だと言えると思います。けれども、割とよく読まれる時があるとするれば、それは葬  
儀の時です。特に 3 節の言葉が、人生の終末と重ね合わせて響いてくるからと言う

ことが出来ると思います。

—「あなたは人を塵に返し「人の子よ、帰れ」と仰せになります。」

「塵」と言う言葉は、原語では、**粉碎する**とか**砕く**とかいった意味だそうです。まるで死んだ後、骨が砕かれるようなことを想像させます。しかし、この詩編は、人間の命の無常、空しさを歌った暗い歌なのではないでしょうか？ そんなことはありません。これもまた、神様への信頼を歌った、信仰の歌なのです。そのことを少し見てゆけたら、と思っています。

### [1] 聖書は私たちの一生の「幸福」を問うている

この詩は、表題に「神の人モーセの詩」とあり、『聖書教育』誌のように、モーセの生涯を振り返りながら味わうことも意味があると思いますが、恐らくこの詩はモーセの作と言うのではなく、イスラエルの歴史を導いたモーセの名を借りて、後にバビロン捕囚も経験した詩人が、罪や苦しみも味わい、その中で光を求めた一人の信仰者の歌であろうと言われています。その意味では、私たちとも繋がるのです。この詩人は、恐らく、当時の人生の晩年 70 才くらいの人の手によるものではないかと想像する学者もいます。この詩人は 10 節でこう語ります。

「人生の年月は七十年程のものです。健やかな人が八十年を数えても得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。」と。

早いものでもう 10 月を迎えています。ついこの間新年を迎えたばかりだと思ったのに、とってしまいますのに。一年がこんなに飛ぶように早いのだったら、本当に私たちの一生は、瞬く間に過ぎてしまうと思えてしまいますね。4～5 節にはこうありました。

「千年といえども御目には 昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。  
あなたは眠りの中に人を漂わせ 朝が来れば、人は草のように移ろいます。  
朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい 夕べにはしおれ、枯れて行きます。」

ここで、私たちはちょっと立ち止まりたいと思いました。それは、私たちの人生の「幸福」「しあわせ」についてです。“朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい 夕べにはしおれ、枯れて行く”のが私たちの人生であるとして、私たちはその一生の間、何を私の幸い・幸福として生きているのか、それを聖書は、私たちに問うているように思えるのです。

先に言ってしまうと、この 90 編では、この信仰者の心から切望していることは、**神様の顧みと祝福**です。

13 節に「主よ、帰ってきてください」と訴え、14 節では「あなたの慈しみに満ちたらせ、生涯、喜び歌い、喜び祝わせてください」と祈っています。

私は思ったのですが、聖書は、驚くほど、私たちが普通に考えている**幸福の条件**

に関心が無いのではないのでしょうか？ 特にこの詩編90編は顕著だと思いますが、まず私たちが幸福の条件として挙げることが多いであろう「健康」についても、「健やかな人が八十年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎない」と、健康が第一ではないと言っています。また、ここでは、旧約聖書の中での祝福のしるしとも言える「富」「財産」、或いは子宝に恵まれ、祝された家庭を持つとか、現代の私たちが考えやすい幸福の条件についても、まったく触れていません。

私たちはいつまでも「健康」でいて、「富」や「財」、または「家族」、そのために私たちは生きるのだ、働くのだ、それが人生の幸いだと私たちは思っていないのでしょうか。それが誤っているとは思いません。けれども、それだけが幸福の条件であるとしたら、それらが失われたり、脅かされたら、それは「不幸な人生」となってしまうのでしょうか？そこを聖書は突いているのだと思います。

この詩編の詩人が、家庭を持っているのか、裕福な人なのか、貧しい人なのか、それは分かりません。しかしこの人は、一人の個人として、人間として、今、人生の晩年を迎え、ただ神様の前に立っている、いえ、立たされているのです。その中で、この人は、“神様の御怒り”というものを目の当たりにしています。7節から9節です。

「あなたの怒りにわたしたちは絶え入り あなたの憤りに恐れます。  
あなたはわたしたちの罪を御前に 隠れた罪を御顔の光の中に置かれます。  
わたしたちの生涯は御怒りに消え去り 人生はため息のように消えうせます。」

近づきつつある死の現実を思う中で、この詩人は、自らの生涯のいたらなさ、罪深さを顧みざるを得ない中にあるのです。神様、私の罪は、あなたの怒りを買うものであり、それ故、私は消え去る外ないのだ、と言います。この詩人は、自らの人生を振り返り、正面から神様にぶつかっているのです。

“あなたは必ず神様と向き合う時が来る。あなたがこの世界を生きているということは、神様に造られた存在として生きているのだ、毎日あくせくして働き、いつしか歳を重ねるが、それは言ってみれば表面的なこと、あなたはやがて神様の許に帰って行く者なのだ”。神様はそう語っていると思います。…しかし神様のもとに帰る時、自信を持って立ち得る人など実は一人もいないのです。この詩人は畏れを抱えています。「御怒りの力を誰が知りえましょうか。あなたを畏れ敬うにつれて あなたの憤りをも知ることでしょう」(11節)と。しかし、この畏れは、とても大切な畏れなのではないのでしょうか。それがこの詩人の救いにも繋がっているのではないのでしょうか。神様は、ご自分に来るものを拒まず、決して軽しめることはないからです。

## [2] 死の最中に「生」を見出す信仰

12節で、詩人は、「生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることが出来ますように」と、神様に祈ります。そしてその後、連続して5つの願いを述

べています。「主よ、帰って来てください。」「あなたの僕らを力づけてください。」「あなたの慈しみに満ちたらせてください。」「喜び祝わせてください。」「喜びを返してください」(13～15 節)と、“このような私ですが、私を祝福してください”と、大胆な懇願をしています。特に 13 節は、「主よ、帰って来てください」と、私を去らないで、帰ってきて下さい！ と叫ぶように願っています。ちょうどあのエマオ途上の弟子たちが、なお先を行かれようとするイエス様を強いて引きとめ、「私たちと一緒に泊り下さい」と強く願ったことを思い起こさせます。

実は、あのマルチン・ルターはこの詩編 90 編を特に愛したと言われています。1534 年から 35 年にかけて、ルターが大学で詩編 90 編の講義をした記録が残っています。ルターは実は、沢山の病気持ちだったと言われています。そのせいもあり、もう晩年に近い頃です。ルターはこの詩編 90 編についての講義で、中世以来歌い継がれてきたキリスト教の民衆歌にあたる言葉から次の一節を引用しています。『生の最中であって我々は死の内にある。』——ルターは、これは福音ではなく、律法が告げる声だと言いました。厳しい言葉です。我々は、死の中にあるのだと。

その後で、ルターは、「しかし、私はこう歌う。福音の声は、死の最中であって我々は生の内にあると歌って力づける。」と言いました。今健康である私たちであったとしても、「死」は訪れます。「死」は不可解であり、捉え難く、時に残酷ですらあります。しかし、ルターは言いました。——「死の最中であって我々は生の内にある」！——そのように言えるのは、他でもありません。私たちの人生は、実はキリストの御手の中にあるということです。私たちの罪や弱さを覆う十字架の赦しと、主のお甦りによる、復活の生命の確かな望みに生きる者は、死すべき命の中に、既に、キリストが与えて下さる永遠の生命を宿しているのです！

[結] 「わたしのもとに帰ってきなさい」

イェルク・ツィンクというドイツの神学者のエッセーのような本『わたしは よろこんで 歳を取りたい』が、よく読まれているとのこと。3 年前に 94 才で召されたツィンクの、自分の死を見つめて綴った文章が、美しい写真とともに、読みやすい本になっています。お薦めしたい本です。(こぐま社発行、1,200 円)

その本の中で、ツィンクは、私たちの弱く貧しく思える命の中に、キリストの命が宿っていることをこのように書いています。

「私という木の枝が、曲がっていたからと言って、それは大したことはない。むしろそれにもかかわらず、私に居場所が与えられ、神の光を受けながら、生きることが許されてきたのだ。…ドイツの黒い森の松の木の下に、古いブナの木が立っている。百年以上も昔、誰かがこの木に石造りのキリスト像を取り付けた。木はその像を受け入

れて、それを抱くようにして成長した。…もしかしたら私の人生も同じだ。キリストが私の中に育ち、私のうちにおられて、今、人生の最終地点にいるこの私という人間を造って下さっている。」——私たちがキリストを抱くのではなく、キリストが私たちの中に入ってきて下さり、私の命を形造って下さっていると言うのです。凄いことではないでしょうか！

さらにツィンクはこう書き、祈っています。「私が何者で、自分にどんな価値があり、何を使命にするのかをめぐって私はこれまで何年も費やしてきた。今この歳になり、私は別離の時を迎えている。自分を磨き上げようなどの努力からももうお別れだ」。

「神よ、いまわたしは 自分の人生を思い返しています

わたしの業績ではありません それはとるに足りないものです  
またわたしが行った よいとおもわれるわざのことでもありません  
やるべくして やらなかったことの重さに比べたら それは 重さにすらならないのです  
不安や罪におののくときには あなたがそばにいてくださいました  
多くの耐え難いこともありました  
なんのための こんな苦しみや苦勞をするのか  
それがわからないことも 多々ありました  
どうか あなたにお会いしたとき その意味をお教えてください  
わたしの仕事はおわりました  
夢は過ぎ去り いま ただあなただけがおられます  
どうか 平安のうちに あなたの みもとに帰らせてください  
あなたの愛を ずっと見せていただきたいのですから  
父と子と聖霊の神に、 み栄えがありますように  
あなたは はじめにおられ いまも そして 永遠におられるかたです

「人の子よ、帰れ！」。そう、私たちには、帰る所、戻れる所があるのです。

——「主よ、あなたは代々にわたしたちの宿るところ。山々が生まれる前から 大地が、人の世が、生み出される前から 世々とこしえに、あなたは神。」

このスケールの大きな神は、今、主イエス・キリストとして、私たちを招き、今朝もこのように語りかけておられるに違いありません。

——「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11:28)と。

お祈り致します。